

緑爽会会報 No. 140

2015年10月22日発行

日本山岳会 緑爽会

発行人 松本恒廣



デザイン・制作 関塚貞亨会員

～～《報告》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

10月例会 中村純二名誉会員講演会「緑への想い」

荒井 正人

出席者： 田邊壽、梨羽時春、松本恒廣、渡部温子、鳥橋祥子、大島洋子、島田稔、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、川口章子、小泉義彦、西谷隆亘、西谷可江、荒井正人(以上緑爽会々員) 伊藤博夫、大森喜夫、笠松幸衛、勝山康雄、神谷雅行、早川滉、南川金一、宗實二郎、宗實康子、横山厚夫、夏原知子 計26名

10月例会は、日本山岳会副会長も務められた92歳の中村純二名誉会員と、奥様のあや会員をお迎えし、「緑への思い」と題してご講演をいただきました。

はじめに、レジメに沿って大病を克服してご健康を取り戻された経緯やその後の旅行のこと、「ほうおう座流星群」やオーロラのお話などがあり、そこまでの振り返りの90枚ほどのスライドを見せていただきました。国内外のご旅行の解説は大変丁寧で、オーロラの説明では、E層、F層といった専門的用語や、私達素人にはすぐには理解出来ない、なぜ赤いオーロラとなるのかの解説などがよどみなく出てきて、さすが科学者と感じ入りました。

後半は、山岳会の苦労話の後、自然保護に対する思いを語られましたが、そこには第一次南極観測隊の一員としての体験から得られた思いが底辺にあるように感じました。レジメではこう書かれています。「昭和基地では男ばかりの生活を送り、女性も屢々話題に上りました。そして今度文明社会に戻れば、どんなに女性が美しく見えることかと楽しみにしておりました。ところが、宗谷でケープタウンの港に着いた時、14名全員の心を完全に奪ったのは一様に、女性ではなく『緑したたる自然』でありました」

生物にとっていかに緑が大切かということです。国内外の自然破壊の事例とそれに対するご意見もお話しされました。そこでは、これからの山岳会や科学者のあり方を示唆されたように思います。

*当日の講演会資料をご希望の方は、事務局までご一報ください。 [小泉義彦会員撮影]



京都と北海道の恩人・田辺朔郎

田辺朔郎（1861～1944）は京都と北海道の恩人とされている。京都では琵琶湖からの疎水を完成させ、近代都市・京都の功労者として、初の京都名誉市民となった。琵琶湖疎水計画は、田辺朔郎の工部大学校（東大工学部の前身）土木科の卒業論文だった。それが時の知事・北垣国道の目に止まり、北垣は卒業した田辺を京都に呼び、現場の監督を田辺に任せて疎水工事は完成した。田辺の能力に惚れ込み、北垣は田辺を娘婿にした。

北垣国道が北海道長官に転じて、北海道の開発には鉄道の敷設が欠かせないことを知ると、またも目を付けたのが田辺朔郎の能力だった。帝国大学教授から北海道鉄道部長として赴任した田辺は、自ら藪を分けて測量をして歩き、路線候補地を決めた。最大の課題は、日高山脈のどこを越えて鉄道を東へ伸ばすか、だった。春になって雪面が凍るのを待って馬で山へ入り、鉄道が越えるによい峠を見付け、狩勝峠と命名した。

旭川～釧路間が全線開通した2年後の明治42年、鉄道で峠を越えた武田久吉は、「傾斜がすこぶる急なため、二台の機缶車が列車の前後に在って、牽引と推進に努める。間もなく狩勝で、全線中の最高点、海拔六〇〇呎の地に在り…。ペンケシットウクヌプリの隧道を三分余りの時間で潜り終われば、身は十勝にあり…。鉄路は開闊な斜面を之曲して下る」と描写している（『明治の山旅』）。武田は明治40年札幌農学校に赴任、明治42年の夏休みに十勝や千島の植物調査のために道東へ向かったのがあったが、鉄道開通の陰に、後に山岳会会員になる田辺朔郎の苦労があったことなど、元より知る由もないことであった。

15年ほど前、私は大雪山の山を登り終えて、引き続き日高の山へ向かおうとした。旭川でかなりの時間があつたので、図書館へ行ってみたところ、郷土関係人物コーナーに田辺朔郎の業績を記す書籍があるのを目にして驚いた。東京の図書館でも見なかったからである。手にして見ると、鉄道建設の功績を讃えて「北海道の恩人」とあり、旭川市立図書館の見識に敬服したのであつた。田辺朔郎の業績は、琵琶湖疎水で多くを語られるものの、北海道の鉄道で語られることは少ないからである。

田辺朔郎は在道10年、北海道の鉄道に目処がついたところで京大教授として赴任、土木工学の権威として、国内のほとんどの大きな土木工事の相談にもあずかっている。田辺朔郎は帝大教授から北海道へ行き、当然、帝大に戻るものと考えていた。それが京大になった裏には、次のような事情があつたと見られている。2番目の帝国大学を設けるに当たって、誰しもが大阪を考えていたものを、北垣国道が京都を強く主張してそれが実現、東京に負けない大学にするため、娘婿の田辺朔郎を京都に行かせたというのである。

朔郎には四男一女があつたが、長男は早くに死去、次男が主計であつた。朔郎は、伯父の田辺太一の長男が事故死して太一家に跡継ぎがないのを見兼ねて、主計を田辺太一の養子に出した。勉学への援助を受けた恩義に応えるものだった。したがって田辺主計は、父親の伯父・田辺太一家を継ぐことになった。

田辺主計は同志社大学英文科を卒業、三井銀行に就職した。山岳会への入会は藤島敏男・田辺多聞の紹介だった。田辺多聞は朔郎の三男で、主計の弟。主計は得意の英語力で、1930（昭和5）年ヤングハズバンドの『エヴェレスト登山記』訳出刊行したのは、わが国のヒマラヤ文献翻訳の嚆矢であり、その後も、ハントの『エヴェレスト登頂』、パウアーの『カンチェンジュンガをめざして』、メイスンの『ヒマラヤ』、スマイスの『カメット登頂』を望月達夫と共訳している。

名誉会員への推戴を辞退

1974（昭和49）年、山岳会評議員会は田辺主計を名誉会員に推したが、田辺は固辞して受けなかった。このことは、望月さんが会報（534号）と『山岳』（第八十五年）に書いた追悼文にのみ見られることで、なぜか当時の評議員会や理事会の公式記録には残っていない。名誉会員になるのを断った人は、田辺が最初にして最後であろう。そのことこそが、田辺主計の価値観・人生観であり、そのことを記録に残しておくことこそが田辺主計の名誉になっただろう、と私は考える。

入会して50年になる1983年を前にしたその前年の7月、田辺主計は山岳会を退会した。その心情を測り知ることは難しいが、その頃に、現・緑爽会会員の関塚さんが田辺主計に会っている。1978（昭和53）年3月、会室が現在の場所に移転して間もない時である。関塚さんが図書室にいたところに来た人が「田辺主計です」と名乗り、「今日は会報で見て、図書室を見たくて来たので案内して欲しい」と頼まれた。独立した図書室ができて閲覧室もあると知り、開設披露パーティーに先立って見に来たのだった。「お茶の水の図書室には田辺さんから沢山の本を頂いたと聞いています」と関塚さん。田辺主計は「前のさくらビルは暗かったが、明るく立派になった」と新しい図書室を喜び、「昔は会報にかなり投稿したが、最近届いた会報の目録を見ても、私の名前はなし。会のお役に立てなくなっている」と語っていたという。初対面ながら、自分の名前と昔のことを知ってくれたことが嬉しかったようで、二日後に関塚さんの許に田辺からの喜びの気持ちを認めた葉書が届いた。会報390号の「ルーム基金応募者」欄に田辺主計の名前があり、5万円を寄付している。これらのことから、田辺主計の退会の動機は、「役に立たなくなった老兵は去るのみ」の心境だったと推測する。

「田辺さんらしい最期」

晩年の田辺は荻窪のマンションの一室に夫妻で住んでいた。やがて奥さんが亡くなり、一人住まいになった頃である。駅近くで昼食のラーメンを食べ、本棚から抜き出してきた一冊の本を古書店で売り、その足でコーヒー店へ行って、コーヒーを飲みながら午後の時間を読書で過ごす、それが毎日の日課だった。荻窪在住の会員・横山厚夫さんは、そんな田辺をよく見かけていた。達観した人生というべきか。

人の最期の有り様は、誰しも自分では決めようがないとはいえ、田辺主計の場合はかなり異色だった。最後は一人、有料老人ホームで過ごし、高齢で訪ねて来る知人や身内の者も少ないというケースは珍しくない。田辺主計の葬儀には、山岳会での友人、望月達夫・吉沢一郎・島田巽・織内信彦の各氏のほか主計の奥さんの親族数名が駆けつけて執り行われた。火葬場へは望月・織内両氏だけ、骨拾いも両氏だけで、「田辺さんらしい最期だという感をしみじみ味わった」と望月さんは述懐し、「表面はまことに穏やかで、およそ人と争うようなことのなかった田辺さんの胸中には、常人には及びもつかない梃でも動かぬ芯の強さがあつたのだと、いまにして思う」と生前を回想している。

田辺主計が活躍したのは主にお茶の水時代であり、私が入会した時にはすでに会を去っていて面識を得る機会はなかった。しかし、その功績と人柄を知るにつけ、強く惹き付けられたのは、名誉などといった冥利を求めない、その価値観であり、人生観であり、それを貫いた芯の強さであった。

待っていてくれた本

小原 茂延

池袋のジュンク堂書店には時折り出掛ける。住んでいる街の書店では置いていない山岳書を物色すると、地形図を求めるとき、地図センター月刊の「地図中心」の特集号に惹かれて内容を確認したい場合などである。例外もあって、先日は上階フロアの動植物関係のコーナーで図鑑類を探していた。ふと、書架の最下段に目をやると「自然有情」のタイトルがあり、副題に『雑木林の花や虫たち』そして何より私を喜ばせたのは著者「足田輝一」の名前であった。

足田輝一は、北大動物学科を卒業(1941)、朝日新聞社に勤務して「科学朝日」「週刊朝日」各編集長、出版局長等を歴任して、退職後はナチュラルリストとして自然探究の生活を続けた方で、昭和50～60年代に雑木林の自然を題材にした著作があり、私も「雑木林の四季」「雑木林の博物誌」「雑木林通信」等を通して多摩の自然に親しんだ時期があって懐旧一入であった。

さて、件の「自然有情」は新刊本とも見えぬ古びた外観、裏表紙に書店が付けたと思われる小さな紙に赤い字で「こちらの本は美本ではありませんが ご了承くださいませ。現品のみの貴重な書籍です。」と印刷されてあった。(1982年5月28日 草思社の発行)

表紙は、多摩丘陵の新緑鮮やかな雑木林、木漏れ日の道を撮ったものに右に自然、左に有情の文字を入れた装丁で裏表紙には「武蔵野の花野を切り取った写真」も心地よい。内容は早春から冬枯れまで自然への愛着溢れるエッセイが48編おさめられている。どのエッセイにも著者の該博な知識と著者撮影の写真、磨かれた文章に感嘆させられる。

この本が刊行されて33年、新刊はどんな旅を経たものか、歳月と共に若干の黄ばみも出現しつつも、心ある書籍を扱う人々の誠によって大型書店の書架に収められ、私が目に止めるのを「待っていてくれた！」のであるかと夢想すると、発刊時に容易く買った書籍よりも身近に感じ、散策に行くと此の書を繙くのが愉しく、めぐり会いを感謝している。



武蔵野の林はるかや遠青嶺(ヒメザゼンソウ咲く入間市宮寺大谷戸湿地にて) [中村好至恵会員画]

尾瀬で3ヶ月働いて

荒井 正人

前号の<尾瀬通信>では、働き始めて50日が経過した頃に思ったことをお伝えしました。実はその1ヶ月後、どうにも腰が痛くてたまらず、下山して医者に診てもらいました。その結果、治療を優先するとの決断を下し、あえなく私は3ヶ月で尾瀬を離れることとなりました。何とも情けないですが、それでも前向きにとらえています。今後も山に登るための勇気ある撤退であったと。今回は、私の働きぶりを振り返ってご紹介することにします。

残雪豊かな5月下旬に小屋開けを始めました。豪雪から小屋を守るために打ち付けた板や雨戸などを外して倉庫に収納する作業、小屋の周辺で雨の時でも様々な仕事ができるようスペースを確保する小屋がけ、ヘリで運ばれるドラム缶・プロパンガスボンベ・米やビール、といった重たい物資の搬送。外仕事はどれも力仕事です。

営業開始となれば旅館業としての内仕事も始まります。さすがに調理そのものは出来ませんが、調

理補助・配膳・盛りつけといった厨房での作業、受付・部屋への案内、売店のレジ立ち上げと販売、客室掃除・整備（布団のたたみ直しやシーツ・枕カバー準備など）、風呂掃除と入浴に向けた湯加減調節、それに発電機の切り替え（これは離れた発電室へ行きます）などなど。

お客様が到着する午後1時頃からは、こうした仕事が輻輳し、受付と厨房・風呂・客室間をコマネズミのように走り回っていました。おかげで体重はみるみる減って、お盆の頃に下山して帰宅後の腹ぺこ状態で計ってみると、何と赴任時から15キロも落ちていて、これには我ながらビックリ！5月末、早くも水芭蕉のシーズンとなり、ツアーのお客様がドッと増えます。

そんな一日は4時起床。朝靄の中をちょっと歩いて発電機切り替え。厨房に挨拶してBSで天気予報を確認。受付売店のレジをチェックし、土産品を並べて玄関掃き掃除。白板に天気予報を書いてサンダル・スリッパを揃える。すでに厨房ではお弁当のおにぎりをスタッフが握りつつ朝食の準備。多いときは100個以上握るのだ。

こんな忙しい時に私は邪魔者でしかないと思うので風呂掃除に回る。大小ふたつの風呂掃除には小一時間要する。すでに汗びしょだが、刻一刻と変化する尾瀬ヶ原方面の霧の動きや色合いの変化する至仏山をチラチラみることで気分はいい。

朝食1回目が終わりと団体様が出発すると別館の掃除が可能になるので、そちらに回る。2回目の食事が終わる頃、ようやく私達の朝食だ。起きてから3時間経っているから、お腹はすいているのにご飯と味噌汁が五臓六腑に染み渡るがごとくで、そんなに食べられない。

少しの休憩の後、全員出発すれば本館も合わせて客室の整備の続きを行う。途中「お茶」を挟んで正午までに宿泊者受け入れ体制を整える。この後「先休み＝後出」か「先出＝後休み」の交代制だが、例えば先休みだと、14時までの休憩時間に東電分岐辺りまで原の様子を見に行つて、途中電波の良い地点でメールチェックとか、私物を洗濯したりして過ごす、手紙を書くといった間に時間が経ってしまう。

仕事再開すればすでに何人かのお客様が到着されていて、夕食のセットの傍ら受付、風呂など忙しくなる。夕食が始まれば下膳口に立ち、トレー・食器をガンガン洗う。洗浄機を使うが手早くしないと追いつかない。まさに戦場のような慌ただしさだ。

2回の食事が済み、洗い物も終えて朝食のセットまで済ませてから夕食となる。だいたい20時近くになっている。レジを締め、売店を片付けて、翌日の確認をして自由時間となるが、消灯とその後の発電機の切り替えの仕事があって、残り湯に入るのは21時過ぎ。屋根に出て外気を吸い込み、天の川を眺めて22時過ぎには就寝だ。

ニコウキスゲの時期も平日といえどもそうヒマではない。おまけに休みは山に行ってしまうし、65歳の身体にはチョイとハードであったか。登りたい山と、登れる山のミスマッチが遭難の原因だと先般の会報に出ていたが、さしずめ私の山小屋での仕事は、「したい仕事」と「できる仕事」の大いなるミスマッチだったと言えようか。

（そんなことで、小屋に行ってみるかと考えていた方には本当にごめんなさい）



－小屋の屋根に上がって至仏山を眺める－

9月山行 雨で流れた源次郎岳行

今、私の手元にあるのは別冊山と溪谷季刊誌「ビスターリ」(ネパール語でゆっくりという意) 1990年冬号。そこには近藤信行、緑夫妻が参山居(お二人の勝沼にある山荘)から裏山ともいえる源次郎岳(1477m)に登るべく歩き出された時のカラー写真が載っている。これを見て何時の頃からか皆でお訪ねし、そこから源次郎に登るプランを考えるようになった。しかし、アツという間に月日は流れ、今ご夫妻は東京住まい。地元山梨支部の里見さんによるとこのコースは今や廃道と化し、現在は日川林道の奥、嵯峨塩温泉(当時は鉱泉)前からのルートのみのものである。折しも台風襲来、中止せざるを得ず、次の機会を待つことにしよう。

尚、蛇足ながら、山村民俗の会代表の岩科小一郎著「大菩薩連嶺」によると源次郎は3人いて、木曾義仲一族の岩竹源次郎、恩若の峯に居た恩若源次郎、山麓萩原の里に居た竹伐りの源次郎、このうち誰か? 尤も古文書「甲斐國志」には源次郎岳の名はなく源次嶽となっているそう。前述岩科氏は「近頃は訪う人はまったくない。あの黒木立に包まれた山頂は、霖雨には金鶏が鳴くという怪談にふさわしく、今でも静まりかえっていることであろう。」と結んでいる。(松本恒廣)

[9月10日当日の山行参加予定者] 13名 係:里見清子 松本恒廣、渡部温子、大島洋子、長沢洋、富澤克禮、瀬戸英隆、川口章子、西谷隆亘、西谷可江、石塚嘉一、荒井正人、小原茂延

~~ 《予告など》 ~~~~~

11月山行 11月14日(土)~15日(日) 長澤洋会員の「ロッジ山旅」に宿泊、山行(詳細は8頁に)

12月例会 12月14日(月) 18時 集会室

横関邦子会員のお話しとスライド上映「バルト3国トレッキング(集会委員会主催)に参加して」

・忘年会:会費 1000円(飲食代) 差し入れ歓迎! 申込み:12月8日迄に渡部まで

1月山行 1月16日(土) 七福神参り 担当:荒井正人会員

2月例会 日程未定 山本良子会員のお話し「ユースホステルあれこれ」

- ◎ 会報 No.138 と 139 を緑爽会のホームページに掲載しました。記事中の個人情報(住所、メールアドレスなど)については、デジタルメディア委員会の勧めにより削除してあります。*写真がとても綺麗です!

お詫びと訂正:前号の報告「自然保護全国集會に参加して」の参加者名簿に、樋口みな子会員と福田光子会員のお名前が記載されておりませんでした。お詫びして訂正いたします。

――事務局のつぶやき――

◆中村名誉会員のお元気なのはびっくり。とても92歳とは思えない歯切れのいい話し方で感銘を受けた。JAC自然保護の大先輩としてのお二人、いつまでもお元気でお過ごし下さい。(松本恒廣)

◆中村純二さんの自然保護に対する姿勢、自然保護委員の時よりも濃くなっていると感じた。赤いオーロラ? 別世界の楽しさを知る。病をのり越えて日々是好日 お元気で居てほしい。(渡部温子)

◆中村純二さんのお話を興味深く伺った。いとこのつれあいが第55次南極観測隊として越冬したからだ。彼もオーロラが見たいと言っていたが、帰国する時彼の目に、緑はどのように映ったのだろうか。今度聞いて見たい。(荒井正人)

◆南川さんの「お茶の水時代の人」のシリーズが終了した。格調高い記事だった。その記事に、琵琶湖疎水計画を指揮した田辺朔郎の話がある。先日、所用で京都に行った折に琵琶湖疎水記念館を訪れた。記念館には、東京遷都によって衰退に向かっていった京都を、疎水を建設することで甦らせた田辺について多くの資料が展示され、彼の功績を讃えている。だが、彼が後に日本山岳会に入会していることが、資料のどこにも見当たらなかった。残念なことである。(夏原寿一)

+++++

11月山行計画

「ロッジ山旅に泊まって、飯盛山の静かなルートを歩く」

日程：11月14日(土)～15日(日)

宿泊先 「ロッジ山旅」 JAC 会員・長澤洋氏経営
山梨県北杜市大泉町西井出 8240-4012 TEL/FAX 0551-20-5634

集合 ・ロッジ山旅に 14日、17時までにチェックインして下さい。
必ず事前にロッジ宛て、到着駅と時刻をご連絡願います。
ご連絡いただければ最寄り駅まで(長坂とか小淵沢)長澤さんが迎えに来て下さいます。
・または：
小淵沢駅改札口に 15時集合
長澤さんに迎えに来ていただきます。

*集合については、申込時に担当・荒井にお伝えください。

ハイキング 15日に 三沢口からの飯盛山へ 3時間程度のハイキング
朝食後、マイクロバスで登山口へ。
登頂後は平沢口(もしくは平沢)に下山。長澤さんがハイキングの途中で引き返してバスを下山口に回してくれます。
*出発時刻、下山後のことや乗車駅については現地でお話があります。

会費 1万円

参加申込 前日13日までは、荒井携帯(090-7719-7855)まで。
以後何かあるときは松本まで。



[中村好至恵会員画]